# 十六　五十歳からの出発　佐賀の お母さんと呼ばれた　楠の木おばさん

福田　よし　（一八九六～一九五六）

佐賀地方には、いたるところに、昔のおもかげを伝える楠の木がしげっています。

人の心をなごませ、ほっとする空間をつくっています。そして、県庁付近にはみごとな楠の木がたくさんあります。

空高く枝を広げ、あざやかな緑の葉をしげらせ、何百年もたった楠の木です。佐賀県の旗のしるしにもなり、県の木として、親しまれています。しかしこれらの楠の木が切られそうになった時がありました。

みごとに栄えた楠の木（佐賀市、県庁前）

それは、太平洋戦争が終わってまもなくのことです。堀のまわりの楠の木の持ち主が、税金をはらうために、全部切りたおして、売ろうとしたのです。楠の木はタンスづくりにとてもよく、虫よけのしょうのうをつくるのにも材料となるのです。

このことを聞きつけたよしは、切ることをやめるように、持ち主の所にお願いに行きました。困ったのは持ち主です。税金をおさめないわけにはいきませんし、切るなといわれても、お金の出るところがないのです。戦争が終ってまもなくのことで、だれもが自分の生活でせいいっぱいの時代でした。しかし、どうしてもくいとめたいよしは、

「そのお金はなんとかします。どうか、楠の木を切るのだけはやめてください。」と、何回も繰り返したのみました。楠の木を守るのが佐賀に住んでいる人のつとめだと考えたのです。

よしは、明治二十九年(一八九六)、佐賀郡川副町早津江で弥富家の三女として生まれました。よしは、恵まれた少女期をすごし、十九歳の時、結婚しました。しかし、うまくいきませんでした。二十九歳の時、再び八女市の福田の家に嫁ぎ、やっと幸せをつかむことができました。しかし、幸せもつかの間、三人の子供を残して、夫がなくなったのです。その後、よしも発病し、苦しい日々が続きました。そして、母と子四人は、佐賀にもどってくらすようになりました。よしはもう、五十歳になっていました。戦争がようやく終わり家族や夫をなくした人が、大変多かった時代でした。

戦争がいろいろな面でかげを落としていました。よしは、自分のことを重ねあわせずにはいられませんでした。何とか手助けをしたいと思い、昭和二十五年に、みゆき会(後の※母子連盟)をつくりました。そのころ、はじめて、民主主義の考えが入ってきて、人の権利や、女性の発言がしだいにみとめられるようになってきましたが、まだまだ女性が同等に何かできる時代ではありませんでした。しかし、弱い母と子の立場や、女性の声を代表する人が必要だと、よしは考えました。

そこで、教育委員会にも女性が出るべきだということで、中野緒佐子という人を、当選させる運動をしました。みゆき会のお世話もしながら、い

福田　よし(佐賀新聞社提供)

そがしい日々が続きました。

そんな時、楠の木のことを聞いたのです。自分のお金を全部、投げ出してもとうてい足りません。よしは、楠の木の根元にすわりこむことにしました。もう、この方法しか残っていませんでした。

「楠の木を切るなら、私から切んしゃい。」

さすがの業者も切るわけにいかず、何日か待つことにしました。よしは、たくさんの人に、美しい楠の木を守ることの大切さを話して回りました。しかし、相手にされず、からかわれたり、ひどい反対にあったりして、なかなか進みません。

ついに、知事さんのところへ直接(ちょくせつ)いってたのむことにしました。知事さんに、熱心(ねっしん)に楠の木の大切さをうったえました。

「知事として、私も協力しましょう。」

楠の木への愛情は知事さんの心を動かしたのです。その後、市長さんや県会議員さん、町の多くの人にお願いして回り、きふ金を集めることができました。こうして、楠の木の命は、あやういところで、助かったのです。

楠の木をずっと守り続けるためにも、自分が県会議員にならなければならないと思いました。昭和二十六年のことです。そして、よしの選挙(せんきょ)戦が始まりました。その選挙戦はとても目を引くものでした。ま

すわりこんで反対するよし

ず第一に、立候補者がはじめて女性であること、次に、歌入りのにぎやかなものだったことです。その風景は、「福田よし」と書いた長い長いふきながしのあとに、よしが白ハチマキでメガホンをもって、大きな声で歌いながら歩き、その後ろを町の人が、ゾロゾロとついてくるものでした。だれもが知っている炭鉱節の歌詞を変えて「日本政治を美しく、もりたてましょうよ。佐賀の人〜。」と歌ったり、さくらの花をかざった花車を引いたりしてお願いしました。そして、上位当選をはたしました。佐賀県ではじめての女性議員の誕生でした。

県会議員としてのよしは、※母子福祉法をつくるように国会に働きかけたり、母子のためのお金の貸しつけや、母子寮をつくったり、また、母子相談所をつくったりしました。母子家庭と社会福祉のために、一生けんめいでした。

楠の木も天然記念物になり、守りぬくことができました。五十歳からのおそい政治運動でしたが、六十歳で生涯を閉じるまで、人のために働き続けました。女性の地位と、社会福祉のために命を燃し、だれに対してもあたたかい「佐賀のお母さん」と呼ばれるのにふさわしい人でした。そして、自然を大切にする「楠の木おばさん」でもありました。

楠の木おばさんの碑(佐賀市城内の西堀端)